【原　　著】

自主グループに所属する住民の地域活動への意欲とグループでの経験との関連

浅野綾子*

【要　　旨】

本研究は、自主グループに所属する住民の地域活動への意欲とグループでの経験との関連を明らかにすることを目的とした。対象は保健師が支援経験のある共通の目的を有する住民自主グループメンバー237名であり、無記名自記式質問紙調査を実施、有効回答の得られた184名を分析対象者とした。調査内容は「地域活動への意欲」と、住民自主グループでの経験として設定した「わかちあい」「充実感」「モデルとなる人からの学び」「自分自身の振り返り」「先の見通し」「成功体験」「活動を通して得た自信」「ソーシャルサポートの認識」「地域への関心」の９つの枠組みの各質問項目間の関連について相関分析を行った。その結果、特に複数の項目間で比較的強い相関がみられたのは「地域への関心」「自分自身の振り返り」「わかちあい」「ソーシャルサポートの認識」であった。以上の結果より、住民の地域活動への意欲を高めるためにはグループ支援においてメンバーが十分に気持ちをわかちあう機会を作り、自分自身の振り返りを助け、地域への関心が高まるよう働きかけること、さらにソーシャルサポートを実感できるような支援が重要であることが示唆された。

【キーワード】住民自主グループ、地域活動への意欲、グループでの経験、エンパワメント

Ⅰ．はじめに

1986年のオタワ憲章でヘルスプロモーションの活動方法の１つとして「地域活動の強化」が提唱[1)]されて以来、地域の健康づくりにおいて住民の主体的な活動が期待されている。特に近年では地域包括ケアシステムの構築が進められる中、地域活動における互助による支え合いの体制づくりの推進が求められている[2)]。保健師活動においても2013年に改正された保健師活動指針において地区活動に立脚した活動の強化が示され[3)]、健康を切り口とした地域活動を支援する重要性はますます高まっている。

保健師の活動の大きな特徴は、個人・家族のみならず、グループやコミュニティ全体を対象とした支援活動を展開することである[4)]。個人では解決できない課題や多くの人々に共通の課題を解決するためには、共通の目的を持つグループへの支援は地域の社会資源開発としても有効である[5)]。グループで力をつけたメンバーが、いきいきと活動することによる地域への効果は計り知れないものがある。住民によるサービスは、行政とは違った同じ住民の目線で、きめ細やかな柔軟性のある活動を展開し、その素晴らしさに学ぶことも多い。しかし、地域に活動を発展させていくことを期待しながら関わっていても、すべてのグループ、すべてのメンバーが活動を発展させていけるわけではない。保健師が指導的な立場でグループのメンバーを地域活動へと導こうと意気込むあまり、それが却って住民の主体性を奪う結果になっている可能性も高い。本当に住民の力の発揮を望むのであれば、住民自身の力を信じ、グループ内での住民同士の相互作用にもっと目を向けなければならないのではないかと考える。

先行研究では、グループにおけるメンバー個人のエンパワメント・プロセスについて述べられた研究[6)～9)]は多く見られ、メンバー個人がエンパワメントされた結果、活動を地域へと発展させていくことが明らかにされている。したがって個人のエンパワメントなしにグループや地域をエンパワメントする

＊日本赤十字北海道看護大学

（2015.11.5受理）

ことは難しく、グループ支援の中であっても個人のエンパワメントに目を向けなければ、効果的な支援にはつながらないと考える。安梅[10]は個人レベルのエンパワメントの成果の１つとして「現実に立ち向かう意欲」をあげ、松下[11]も「自発的な意欲が実践を生む」と述べていることから、活動するためにはまず意欲を持つことが必要であると考え、本研究では個人エンパワメントの１つの成果として地域活動への意欲に着目したいと考えた。

また、グループの地域への発展プロセスを表す概念としてコミュニティ・エンパワメントが用いられており[12]、その望ましい状態として、人とつながり相互作用しながら住民自らが社会資源となり、地域社会へ働きかけていることが示されている[13]。さらに加藤ら[14]は、グループメンバーが活動を地域に発展させていくプロセスの中で、グループでの経験が地域に伝えていく原動力、あるいは支援者となることを可能としていたと報告している。したがって、グループでの相互作用による効果的な経験が地域への活動の発展、すなわちコミュニティ・エンパワメントにつながりうるのではないかと考えた。

保健師の支援内容とメンバーの活動意欲の関係性[15]や住民組織活動が地域づくりに発展するための保健師の支援内容の特徴[16]など、保健師の支援内容を分析した研究は見られたが、地域活動への意欲とグループでの経験との関連から保健師の支援について検討された研究はほとんど見られなかった。

そこで、本研究では住民の地域活動への意欲を高めているグループでの経験は何であるのか、その関連に焦点を当てて検討したいと考えた。

Ⅱ．用語の定義

地域活動への意欲：自分が暮らす地域の人々の健康と暮らしの向上のために、活動したいと思う気持ち
グループでの経験：グループでの実際の体験とグループに参加する中で感じられた意識

Ⅲ．研究方法

１．調査対象

保健師の支援について示唆を得るため、保健師が支援経験のあるグループを対象とした。北海道Ａ振興局管内で共通の目的を有する自主グループに所属し、現在も活動を継続しているメンバー237名に調査を実施した。回収数は188名（回収率79.3％）であり、有効回答を得られた184名（77.6％）を分析対象とした。

２．調査方法

調査は自記式質問紙法とし、各機関の保健師を通じて住民自主グループのメンバー個人に調査票と返信用封筒を配布、個別に郵送にて回収した。

調査期間は、平成18年９月４日から９月29日であった。

３．概念枠組み

本研究の概念枠組みは「地域活動への意欲」を目的変数、地域活動への意欲に関連があると思われるグループでの経験について、Bandura の自己効力感の概念から導き出された江本[17]の自己効力感の先行要件を参考に、説明変数として「わかちあい」「充実感」「モデルとなる人からの学び」「自分自身の振り返り」「先の見通し」「成功体験」「活動を通して得た自信」「ソーシャルサポートの認識」「地域への関心」の９つの枠組みで考えた。

４．調査内容

質問紙の作成にあたっては、住民自主グループのメンバーにグループインタビューを実施し、結果から地域活動に対する意欲の内容と、地域活動への意欲に関連すると思われるグループでの経験に関する内容を抽出した。抽出結果と先行研究を参考にしながら原案を作成し、研究指導者と地域看護学教員、およびグループ支援経験のあるベテラン保健師のスーパーバイズを受けて妥当性を確認後、住民自主グループメンバー25名にプレテストを実施し修正を加え、以下のとおり質問紙を作成した。

（１）個人属性

対象者の個人属性として「性別」「年齢」「同居家族」「職業」「グループへの所属月数」「所属グループのタイプ」の６項目とした。なお、所属グループのタイプは研究対象が自主グループであることから、田口ら[4]の研究を参考に主体性が大きいとされているセルフヘルプ・グループとボランティアグループとした。なお、セルフヘルプ・グループはさらに本人の会、家族の会とライフステージを共有する会に分類し、「自分の健康について共通の課題を有するグループ(糖尿病予防の会､脳卒中友の会など)」､「家族の健康について共通の課題を有するグループ（介

護者の会、障がい児の親の会など)」、「ライフステージを共有するグループ（育児グループなど)」、「健康づくりに関するボランティアグループ（食生活改善推進員、保健推進員など)」の４つに分類した。

（２）地域活動への意欲

グループインタビューの結果と、中山ら[13]および坪川ら[18]の研究を参考に、11項目を作成した。回答は「そう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「あまり思わない」「思わない」の５段階の順序尺度とした。

（３）グループでの経験

グループインタビューと先行研究を参考に、「わかちあい」５項目、「充実感」５項目、「モデルとなる人からの学び」２項目、「自分自身の振り返り」３項目、「先の見通し」２項目、「成功体験」２項目、「活動を通して得た自信」３項目、「ソーシャルサポートの認識」２項目、「地域への関心」４項目の質問項目を設定した。回答は「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の５段階の順序尺度とした。

５．データ分析方法

各データの基本統計量を算出し、さらに「地域活動への意欲」と「グループでの経験」の各質問項目間の相関関係を散布図で確認すると共に、Kendallの順位相関係数を用いて検討した。データ分析には統計ソフト SPSS Ver.14.0J for Windows を用いた。

６．倫理的配慮

調査にあたり、協力施設に対して文書と口頭にて研究の趣旨と内容を説明し、研究協力の同意を得た。調査対象者には依頼文書にて、研究のテーマ、目的と意義、研究対象となる方への利益と不利益、情報の使用方法、質問紙は無記名で回答していただくこと、得られた情報に関しては秘密を保持し、プライバシーの保護・確保に努めること、回答の意思は自由であり、回答の有無や回答内容により不利益を被ることは一切ないこと、返送をもって同意を得られたとみなすことなどを説明した。回答内容は調査者以外には漏出しないよう個別の返信用封筒を同封した。

Ⅳ．結　　果

１．調査対象者の属性

調査対象者の属性を表１に示した。性別は男性23名（12.5％)、女性161名（87.5％）で、平均年齢は57.4（標準偏差±14.5）歳であった。

また、職業は有職が61名(33.2％)、無職120名(65.2％)、無回答３名（1.6％）であった。

同居者ありが167名(90.8％)、なしは16名(8.7％)、無回答１名（0.5％）であった。

所属グループのタイプとしては、ボランティアグループに所属する者87名（47.3％)、家族の健康課題を共有するグループに所属する者50名（27.2％)、自分の健康課題を共有するグループに所属する者45名（24.5％)、ライフステージを共有するグループに所属する者29名（15.8％)、その他１名（0.5％）であった。(複数回答あり）また、グループへの所属月数の平均は66.1ヶ月（標準偏差±56.4）であった。

表１　調査対象者の属性

n＝184

項目	区分		（％）
性　別	男　性	23人	(12.5)
	女　性	161人	(87.5)
年　齢	20～30歳代	35人	(19.0)
	40～50歳代	53人	(28.8)
	60歳代以上	96人	(52.2)
平均年齢	57.4歳	標準偏差	±14.5
職　業	有職	56人	(30.4)
	無職	120人	(65.2)
	その他	5人	(2.7)
	無回答	3人	(1.6)
同居家族	あり	167人	(90.8)
	なし	16人	(8.7)
	無回答	1人	(0.5)
所属グループ（複数回答あり）	自分の健康課題を共有	45人	(24.5)
	家族の健康課題を共有	50人	(27.2)
	ライフステージを共有	29人	(15.8)
	ボランティアグループ	87人	(47.3)
	その他	1人	(0.5)
グループへの所属月数	36ヶ月未満	55人	(29.9)
	36～108ヶ月未満	84人	(45.6)
	108ヶ月以上	39人	(21.2)
	無回答	6人	(3.3)
グループへの平均所属月数	66.1ヶ月	標準偏差	±54.6

表２　地域活動への意欲

n＝184

	そう思う		ややそう思う		どちらとも いえない		あまり 思わない		思わない		無回答	
	人	（%）	人	（%）	人	（%）	人	（%）	人	（%）	人	（%）
学びを伝える意欲	73	(39.7)	63	(34.2)	33	(17.9)	13	(7.1)	2	(1.1)	0	(0.0)
共に学ぶ意欲	89	(48.4)	59	(32.1)	24	(13.0)	9	(4.9)	2	(1.1)	1	(0.5)
手助けする意欲	81	(44.0)	65	(35.3)	26	(14.1)	8	(4.4)	2	(1.1)	2	(1.1)
イベントへの参加意欲	78	(42.4)	73	(39.7)	22	(12.0)	8	(4.3)	2	(1.1)	1	(0.5)
ボランティアの参加意欲	82	(44.6)	64	(34.8)	26	(14.1)	9	(4.9)	1	(0.5)	2	(1.1)
政策への参加意欲	57	(31.0)	63	(34.2)	45	(24.5)	11	(6.0)	7	(3.8)	1	(0.5)
サービスの創造意欲	53	(28.8)	70	(38.1)	47	(25.5)	8	(4.4)	3	(1.6)	3	(1.6)
協働者を広げる意欲	75	(40.8)	55	(29.9)	41	(22.3)	10	(5.4)	1	(0.5)	2	(1.1)
行政と話し合う意欲	61	(33.2)	67	(36.4)	40	(21.7)	10	(5.4)	4	(2.2)	2	(1.1)
行政への提言意欲	63	(34.2)	47	(25.5)	53	(28.8)	13	(7.1)	8	(4.4)	0	(0.0)
活動の継続意欲	126	(68.5)	35	(19.0)	16	(8.7)	2	(1.1)	3	(1.6)	2	(1.1)

２．地域活動への意欲

地域活動への意欲の回答を表２に示した。「そう思う」「ややそう思う」と回答した比率が高かった質問項目は「活動の継続意欲」（87.5%）、「イベントへの参加意欲」（82.1%）、「共に学ぶ意欲」（80.5%）であった。

反対に「そう思う」「ややそう思う」の比率が最も低かった質問項目は「行政への提言意欲」（59.7%）で、次に低かった項目は「政策への参加意欲」（65.2%）あった。

３．地域活動への意欲とグループでの経験における関連

地域活動への意欲とグループでの経験との関連を表３に示した。Kendall の順位相関係数を算出したところ、すべての質問項目間において正の相関がみられた。「地域活動の意欲」と「グループでの経験」の項目間の相関係数は、「わかちあい」（τ＝.235～.481）、「充実感」（τ＝.141～.472）、「モデルとなる人からの学び」（τ＝.261～.450）、「自分自身の振り返り」（τ＝.302～.512）、「先の見通し」（τ＝.275～.468）、「成功体験」（τ＝.269～.422）、「活動を通して得た自信」（τ＝.128～.414）、「ソーシャルサポートの認識」（τ＝.300～.446）、「地域への関心」（τ＝.295～.536）であった。

その中で特に複数の項目間で.400以上の比較的強い相関がみられたのは、「地域への関心」の「地域への関心の広がり」（10項目、τ＝.413～.536、$p<0.01$）と「地域への愛着の増強」（８項目、τ＝.428～.477、$p<0.01$）、「自分自身の振り返り」の「新たな自己の発見」（８項目、τ＝.405～.512、$p<0.01$）と「自己の成長感」（８項目、τ＝.401～.450、$p<0.01$）および「体験の振り返り」（６項目、τ＝.407～.460、$p<0.01$）、「わかちあい」の「喜びや悲しみのわかちあい」（８項目、τ＝.403～.481、$p<0.01$）と「共感の体験」（７項目、τ＝.401～.451、$p<0.01$）、「ソーシャルサポートの認識」の「協力者の増加」（６項目、τ＝.412～.437、$p<0.01$）および「支持者の増加」（６項目、τ＝.402～.446、$p<0.01$）であった。

中でも地域活動への意欲の質問項目である「共に学ぶ意欲」及び「手助けする意欲」と地域への関心の質問項目である「地域への関心の広がり」の質問項目間（τ＝0.536、τ＝0.510、$p<0.01$）、また地域活動への意欲の質問項目である「イベントへの参加意欲」と自分自身の振り返りの質問項目である「新たな自己の発見」との質問項目間（τ＝0.512、$p<0.01$）の関係が強かった。

Ⅴ．考　　察

本研究の結果において、すべての質問項目間で正の相関が見られたため、特に複数の項目間で相関係数が.400以上の比較的強い相関が見られた「地域への関心」「自分自身の振り返り」「わかちあい」「ソーシャルサポートの認識」について考察したい。

表３　地域活動への意欲とグループでの経験との関連

		学びを伝える意欲	共に学ぶ意欲	手助けする意欲	イベントへの参加意欲	ボランティアの参加意欲	政策への参加意欲	サービスの創造意欲	協働者を広げる意欲	行政と話し合う意欲	行政への提言意欲	活動の継続意欲
		τ	τ	τ	τ	τ	τ	τ	τ	τ	τ	τ
わかちあい	喜びや悲しみのわかちあい	.421**	.396**	.439**	.437**	.412**	.403**	.407**	.481**	.394**	.429**	.399**
	共感の体験	.413**	.407**	.412**	.413**	.397**	.401**	.416**	.451**	.376**	.395**	.378**
	考えを話し合う	.330**	.345**	.372**	.395**	.406**	.397**	.400**	.408**	.364**	.360**	.314**
	本音を語る	.272**	.298**	.334**	.337**	.307**	.333**	.323**	.341**	.296**	.379**	.306**
	メンバーからの受容	.255**	.235**	.299**	.280**	.300**	.238**	.274**	.321**	.280**	.355**	.317**
充実感	活動の楽しさ	.223**	.289**	.315**	.283**	.221**	.291**	.235**	.317**	.274**	.254**	.417**
	活動の充実感	.296**	.366**	.472**	.432**	.402**	.447**	.364**	.435**	.373**	.360**	.391**
	好きなことができる実感	.153*	.228**	.228**	.268**	.262**	.225**	.161*	.217**	.141*	.168**	.264**
	のびのびできる実感	.226**	.294**	.308**	.302**	.285**	.354**	.223**	.336**	.225**	.368**	.387**
	活動の満足感	.299**	.361**	.401**	.436**	.398**	.415**	.338**	.454**	.322**	.363**	.427**
モデルとなる人からの学び	人物モデルを見出す	.332**	.307**	.332**	.352**	.346**	.346**	.261**	.319**	.294**	.331**	.337**
	行動モデルを見出す	.415**	.358**	.357**	.324**	.343**	.361**	.343**	.450**	.387**	.403**	.300**
自分自身の振り返り	体験の振り返り	.367**	.411**	.407**	.444**	.385**	.460**	.314**	.419**	.356**	.440**	.330**
	新たな自己の発見	.387**	.452**	.456**	.512**	.426**	.485**	.368**	.405**	.406**	.416**	.332**
	自己の成長感	.415**	.434**	.401**	.426**	.368**	.431**	.423**	.450**	.389**	.435**	.302**
先の見通し	先の見通しの獲得	.386**	.385**	.376**	.372**	.351**	.430**	.286**	.386**	.349**	.380**	.275**
	自己の方向性の獲得	.414**	.464**	.468**	.362**	.414**	.411**	.331**	.380**	.371**	.365**	.341**
成功体験	活動の成功体験	.289**	.351**	.308**	.389**	.361**	.308**	.301**	.303**	.286**	.271**	.322**
	うまくいった体験	.377**	.418**	.377**	.422**	.339**	.299**	.309**	.325**	.269**	.290**	.335**
活動を通して得た自信	自信の獲得	.371**	.387**	.393**	.382**	.308**	.408**	.371**	.343**	.329**	.387**	.281**
	周囲からの承認	.414**	.360**	.344**	.354**	.318**	.343**	.321**	.362**	.343**	.370**	.294**
	役割達成感	.271**	.194**	.206**	.314**	.177**	.203**	.198**	.182**	.128*	.200**	.213**
ソーシャルサポートの認識	協力者の増加	.347**	.389**	.414**	.379**	.354**	.415**	.414**	.437**	.413**	.412**	.372**
	支持者の増加	.417**	.363**	.408**	.422**	.392**	.402**	.367**	.421**	.371**	.446**	.300**
地域への関心	地域への関心の広がり	.492**	.536**	.510**	.454**	.413**	.438**	.410**	.465**	.429**	.455**	.361**
	地域の実態確認	.368**	.369**	.367**	.373**	.300**	.381**	.306**	.295**	.303**	.384**	.308**
	自己と地域の課題の共通性	.398**	.429**	.332**	.373**	.346**	.366**	.379**	.379**	.394**	.414**	.318**
	地域への愛着の増強	.464**	.477**	.461**	.437**	.428**	.464**	.394**	.450**	.397**	.461**	.376**

Kendall の相関係数　　τ：correlation coefficient　　*：p＜0.05　　**：p＜0.01
欠損値は分析ごとに除外

１．地域活動への意欲と地域への関心との関連について

地域への関心の質問項目のうち「地域への関心の広がり」は地域活動への意欲のほとんどの質問項目と比較的強い相関がみられていた。

住民はグループ活動を通して今までは気づかずに過ごしていた地域の現状を見聞きし、自分の抱える課題が自分の住む地域のあり方に大きく関係していることに気づくことが多くの先行研究においても報告されている[8) 14) 19)]。麻原ら[12)]は、セルフヘルプ・グループとコミュニティ・エンパワメントを意図して組織されたグループでは気づきのプロセスは違うが、同じように「地域の問題に気づく」段階があると述べている。そして個人エンパワメント・プロセスにおいて「気づき」の段階が最も重要であるのと同様に、「地域の問題として気づく」ことから、コ

ミュニティ・エンパワメントの計画・実践という活動が始まると述べている。また平野[20]は、「地域が変わることのスタートラインは、地域の人々が自分の地域はどうなっているのかを知ることである」と述べている。これらのことからも、地域に関心を持ち、地域を知ることが、コミュニティ・エンパワメントにつながる最も基盤となるプロセスであると考えられる。したがって、自分の住む地域へ関心が広がり、その実態を知ることによって内面の意識がゆさぶられ、活動の意欲につながっているものと考えられる。

また、地域への関心の質問項目である「地域への愛着の増強」は、地域活動への意欲の８つの質問項目と比較的強い相関がみられた。これは大森ら[21]の研究において“地域への愛着”の形成が進むと、地域を志向した行動が促進されると述べられていることと共通していた。

筆者は保健師活動の中で「死ぬまでこのまちで暮らしていきたい」という住民の声をよく耳にしてきた。地域への愛着とは、今住んでいるこの地域で末永く暮らしていきたいという思いであると考える。保田[22]らはボランティアの研究の中で、「活動をとおし、地域の中で知り合いが増え、自分自身がいきいきと生活できる環境を得たことにより住みやすさの実感を深め、『地域への愛着』を得ることにつながった」と述べている。メンバーは活動を通して地域の人々とのつながりを実感し、自分の地域を見直すことによって、愛着を強めていることが予測される。また、安梅[23]は「住民が最も普遍的に持っている『住み慣れた地域で、末永く元気で暮らしていたい』といったニーズの実現は、誰も異議を唱えることのないプロジェクトとなろう」と述べており、地域への愛着の高まりは、自分たちの住むこのまちをもっと住みやすくしていきたい、そのためには自分にできる活動していきたいという意欲の高まりにつながっていくものと考えられる。

２．地域活動への意欲と自分自身の振り返りとの関連について

自分自身の振り返りの質問項目のうち、「新たな自己の発見」は地域活動への意欲の８つの質問項目と比較的強い相関があった。先行研究においても、自己の置かれている状況を他人と比較し、自分はまだ良いほうである、幸せであると気づく[7)14)22)24)25)]、また他人を援助する体験を持つことで、役割のある新しい自分を発見する[26)27)]ことが述べられている。特に後者の援助者としての体験は、セルフヘルプ・グループにおいてもボランティアにおいても共通している。援助者として地域の中で自己の果たせる力に気づいたメンバーは、その力が発揮できる機会を求め、活動意欲を高めるのではないかと思われる。

また、自分自身の振り返りの質問項目である「自己の成長感」も地域活動への意欲の８つの質問項目と比較的強い相関があった。北山ら[25]はボランティアが対象者との関わりを通して、自分の成長に気づくと述べている。その気づきが活動を通じて得られるさらなる自己成長への期待を高め、活動意欲につながっているのではないかと考えられる。

さらに、自分自身の振り返りの質問項目である「体験の振り返り」は地域活動への意欲の６つの質問項目と比較的強い相関が見られた。先行研究において、グループ活動を通してメンバーが過去の体験を振り返り、自分を見つめ、向き合うことで、自分の抱える課題の原因に気づくことが述べられている[7)14)19)26)]。麻原[28]が、個人のエンパワメント・プロセスとして自身の客体視から新しい価値観を獲得し、問題解決の実践へとつながると述べているとおり、グループ活動を通して過去の体験を見つめなおす機会を持ち、今までの価値観を変化させ、問題解決に向かって活動する意欲につながっているのではないかと考えられる。

３．地域活動への意欲とわかちあいとの関連について

わかちあいの質問項目のうち「喜びや悲しみのわかちあい」は８項目、「共感の体験」は７項目が、地域活動への意欲の質問項目と比較的強い相関が見られた。

グループのメンバーと話し合い、気持ちをわかちあう中で、自分と仲間の問題の共通点を見出し、課題が明確化される。そこから進むべき方向性が明らかになり、自分たちの地域の中での役割が意識化され、活動意欲につながっていくのではないかと考えられる。麻原[28]は個人エンパワメントの一つとして安心感をあげており、仲間とのわかちあいの体験を通して得られる自分だけではないという安心感が、メンバーのエンパワメントの源になっていると考えられる。仲間との話し合いから得られる共感は、相互関係のある心地よい体験であると思われる。岡[29]は、セルフヘルプ・グループのメンバーが「気持ち」、

「情報」、「考え方」をわかちあうことの目的は、「ひとりだち」と「ときはなち」であり、「ときはなち」の意味の１つが「社会に働きかける」ことであると述べている。特に自分や家族の健康課題を共有するセルフヘルプ・グループにおいて、自分たちの問題を解決するために社会に働きかける意欲を持つためには、このわかちあう体験がなくてはならない過程であり、この過程を経てこそ、地域活動への意欲が高まっていくものと考えられる。

４．地域活動への意欲とソーシャルサポートの認識との関連について

ソーシャルサポートの認識の質問項目のうち、「協力者の増加」および「支持者の増加」は、地域活動への意欲のそれぞれ６つの質問項目と比較的強い相関が見られた。

Kats[30] は、「セルフヘルプ・グループにもっとも求められ、また広く提供されている援助は、情緒的サポートである」と述べている。目的や課題を共有するグループはソーシャルサポートの得られやすい場であり、人は支えあいながら生きているということを実感する場であると思われる。また本研究の調査対象は保健師が支援経験のある住民自主グループであったことから、保健師などによるソーシャルサポートを実感しやすい対象であったと思われる。したがって、充分な相互支援や情緒的サポートに支えられることで、自己の評価を高めて個人の行動を促すものと考えられている[28] とおり、グループ活動において「協力者」や「支持者」がいることを実感することが、意欲の高まりにつながっていたと推測される。

Ⅴ．結　　論

本研究の結果、健康を目指した地域活動への意欲とグループでの経験の関連において、特に複数の質問項目間で比較的強い相関が見られた項目は、「地域への関心」「自分自身の振り返り」「わかちあい」「ソーシャルサポートの認識」であった。

したがって住民の地域活動への意欲を高めるためには保健師はグループ支援において、メンバーが十分に気持ちをわかちあう機会を作り、自分自身の振り返りを助け、地域への関心が高まるよう働きかけること、さらにソーシャルサポートを実感できるような支援が重要であることが示唆された。

Ⅵ．本研究の限界と今後の課題

今回の研究は、限られた一部の地域を対象とし、自主グループとしてすでに地域で活動をしている住民を対象にしたことから、もともと地域活動への意欲の高いものが多く、データに偏りが生じたことが考えられる。さらに測定用具も限られた内容であったため、更なる検討が必要である。今後は所属するグループのタイプによる違いを検討することや、自主グループに所属していない住民、まだ自主化していないグループに所属する住民などを対象に比較検討を重ねることが必要と考える。

謝　　辞

本研究に対し、ご協力くださいました住民自主グループの皆様および市町村保健師の皆様に心より感謝申し上げます。

なお、本研究は、2006年度日本赤十字北海道看護大学研究科に提出した修士論文の一部に加筆修正を行ったものである。また、本研究の一部は第66回日本公衆衛生学会学術集会にて報告した。

Ⅶ．文　　献

１）WHO Regional Office for Europe：Ottawa Charter For Health Promotion、1986、島内憲夫訳、21世紀の健康戦略２　ヘルスプロモーション－WHO オタワ憲章－（ヘルスプロモーションに関するオタワ憲章）、7-16、垣内出版、1995

２）厚生労働省：平成26年版　厚生労働白書　第２部／第６章／第５節 http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/14/dl/2-06.pdf （2015年11月１日閲覧）

３）厚生労働省健康局長：地域における保健師の保健活動について、平成25年４月19日付健発0419第１号

４）田口敦子、錦戸典子、他：保健師活動におけるグループ支援の特徴と意義、看護研究、36（７）、3-12、2003

５）佐伯和子編：公衆衛生看護技術、236-250、医歯薬出版株式会社、2014

６）秋山さちこ、海老真由美、他：住民自主組織に所属する個人エンパワメント構造、日本地域看護学会誌、７（１）、35-40、2004

7）林知里、伊藤美樹子、他：障害児の親の会（SHG）へのかかわり方にみた障害児の母親の心理的エンパワメント・プロセス、日本健康教育学会誌、10（２）、9-20、2002
8）大木幸子、星旦二：セルフヘルプ・グループにおける参加者のエンパワメント過程－炎症性腸疾患患者会会員に注目して－、総合都市研究、83、29-45、2004
9）大池明枝、越田美穂子、他：自主的参加による地域組織活動における住民のエンパワメントを支える要因、日本看護学会誌、15（２）、62-70、2006
10）安梅勅江：エンパワメントのケア科学　当事者主体チームワーク・ケアの技法、13-14、医歯薬出版株式会社、2004
11）松下拡、小栗史朗、他編：公衆衛生における保健婦の役割、3-11、日本看護協会出版会、1996
12）麻原きよみ、加藤典子、他：グループ活動が地域に発展するための理論・技術、看護研究、36（７）、573-586、2003
13）中山貴美子、岡本玲子、他：コミュニティ・エンパワメントの構成概念－保健専門職による評価のための「望ましい状態」の項目収集－、日本地域看護学会誌、８（２）、36-42、2006
14）加藤典子、麻原きよみ：住民グループのメンバーが活動を地域に発展させていくプロセス－認知症高齢者（痴呆高齢者）の介護者グループに焦点を当てて－、日本地域看護学会誌、7（２）、13-19、2005
15）山田小織、守田孝恵、他：住民組織における保健師の支援内容とメンバーの活動意欲、保健医療科学、59（２）、159-168、2010
16）中山貴美子：住民組織活動が地域づくりに発展するための保健師の支援内容の特徴、日本地域看護学会誌、11（２）、7-14、2009
17）江本リナ：自己効力感の概念分析、日本看護科学会誌、20（２）、39-45、2000
18）坪川トモ子、鳩野洋子：地域における住民組織の主体性に関するアセスメント指標の検討、保健婦雑誌、56（４）、316-322、2000
19）百瀬由美子、大久保功子、他：小地域単位の介護者セルフヘルプ・グループに参加することの意味の発展プロセス、老年看護学、７（１）、52-60、2002
20）平野かよ子編：地域特性に応じた保健活動、10-16、ライフ・サイエンス・センター、2006
21）大森純子、三森寧子、他：公衆衛生看護のための“地域への愛着”の概念分析、日本公衆衛生看護学会誌、３（１）、40-48、2014
22）保田玲子、工藤禎子、他：住民主体型閉じこもり予防事業のボランティアが活動を通じて得ているもの、保健師ジャーナル、60（４）、376-383、2004
23）安梅勅江：エンパワメントのケア科学　当事者主体チームワーク・ケアの技法、102-115、医歯薬出版株式会社、2004
24）松村ちづか、川越博美：在宅痴呆性老人家族介護者にとっての家族会の意味－家族介護者の人生観・介護観・家族会へのニーズとの関連－、聖路加看護学会誌、５（１）、1-9、2001
25）北山明子、大西章恵：保健師のボランティアに対する支援の一考察、保健師ジャーナル、60（12）、1204-1208、2004
26）星野明子、成木弘子、他：Ｆ市保健推進員活動における参加者の活動体験とその意味、聖路加看護学会誌、３（１）、48-53、1999
27）布花原明子：地域における家族の介護力形成過程－住民参加によるミニデイサービス発足過程に焦点を当てて－、西南女学院大学紀要、15-23、2005
28）麻原きよみ：エンパワメントと保健活動　エンパワメント概念を用いて保健婦活動を読み解く、保健婦雑誌、56（13）、1120-1126、2000
29）岡知史：セルフヘルプグループ、59-87、星和書店、1999
30）Kats A・H 著、久保紘章監訳：セルフヘルプ・グループ、28-40、岩崎学術出版社、1997

Relationship between Motivation for Community Activity and Experience in Community Groups

Ayako ASANO

Japanese Red Cross Hokkaido College of Nursing

Abstract :

The purpose of this study was to show the relation between the motivation for community activity aimed at the people who belong to community groups and their experiences as group members.

The subjects for the research were 237 people who belonged to community groups. Each group shared a mutual purpose and has been supported by public health nurses.

The research was done with unsigned self-written questionnaires. The subjects of analysis were 184 people from whom valid responses were obtained. The subject of the questionnaire was about “Motivation for community activity” and the following nine items, which were set in the framework of their experiences in community groups; “Sharing feelings”, “A sense of fulfillment”, “What one learned from a mentor”, “Self reflection”, “Prospects for the future”, “Success Experience”, “Confidence through group activity”, “Recognition of Social Support”, and “Interest in the community”.

Correlation analysis was done on the relation between the motivation for the community activity and their experiences as group members.

As a result, there seemed to be a rather high correlation between the motivation for community activity aimed at residents’ health and experiences as group members such as “Interest in the community”, “Self reflection”, ”Sharing feelings”, and “Recognition of social support”.

The result of the research suggested that in order to increase motivation for community activity, when we support a community group, it is important for the group members to share their feelings enough, to help them reflect on themselves, to work with them to get more interested in the community, and to help them see the social support available.

Key words :

Community group, Motivation for community activity, Experience in community groups, Empowerment